

<レポート>

講座「広島藩の藩校から修道学園へ」の講義概要
——山田養吉の「十竹軒日録」を読み解いて学ぶ近代広島の形成



畠 眞實 (修道学園史研究会会長
元修道中学校・高等学校校長)

[本稿は、コミュニティ・アカデミー上巻で実施した平成 29 年度に開かれた畠眞實講師による「広島藩の藩校が修道学園として存続・成立」を、学祖の一人 山田養吉の日記を基礎資料にして社会の動きの中で解明した講座の概要をまとめて頂いたレポートです。本誌に掲載したのは、地域における近代教育を形成するのにいかに多くの人が尽力してきたか、そして講師がライフワークとして 取り組んでこられた学祖山田養吉の研究を通して得られた <地域社会と中等教育> についての成果をもとに、今日における地域発展の基がこうした人々の努力により培われていることを学んで、郷里の近代を考える糧となる、と思ったからです。全国どこでも、小学校や中学校を作るためにこのような努力が地元でなされたものです。先祖の人たちの人間形成に資する学校や社会教育に関する講座が大学公開講座でも取り上げられるようになることを念じ、講義の概要をここにまとめていただき掲載することにしました。——UEJ 編集]

はじめに 講座を引きうけた理由

講座のことについて話をいただいたのは、2016年2月の終わりであった。田邊良平氏からメールをいただいた。田邊氏は、加藤友三郎顕彰会副理事長を務められており、加藤家と修道学園が深いつながりがあることから、わたしが修道中学・高等学校に勤務していた時以来よく存じ上げていた。田邊氏は「広島歴史・文化懇談会を立上げて毎月1回、歴史文化の講座を開催しています。主宰は上智大学名誉教授の香川正弘先生です。香川先生も修道学園のことについて話していただけないだろうかとおっしゃっておられます。差支えなければ香川先生と直接話していただきたいと思います。先生(畠のこと)は修道学園の歴史についての勉強会を持っておられると聞き及んでいますのでお願いする次第です。」と記されていた。修道の卒業生以外の方から修道に関する事、藩校のことなどについて話をしてほしいと言われたのは初めてなので少々驚きもあった。修道の文化祭や同窓会などでは修道学園の歴史を話してはいたが、それ以外のところで一般の方に話すことはほとんど無かったからである。

香川正弘先生とはこれまで全く面識がなかったが、専門が生涯教育学で、現在は「コミュニティ・アカデミー上幟」代表を務めておられると知ることができた。なぜに広島藩の藩校とその流れを汲む修道学園に関心を持たれたのかについてお聞きしたところ、「修道を出た親とか親族を持つ人は市内にたくさんおられると思います。わたしの祖父は明治の第1回の卒業生だと聞いています。単に自分の学校のPRではなく、江戸時代の藩校とはどういうものか、明治になってどうして一中にならず、私立学校としての道をたどらなければならなかったのか、郷土のための学校の意識はどのようにして形成されたのか」学びたいという意見であった。このことは講座を引き受けるうえで貴重な示唆であった。特に「単に自分の学校のPRではなく」と言われた点は、わたし自身もそのように強く思い、心しなければならぬことと肝に銘じたのである。もう一点、「(藩校が)明治になってどうして一中にならず、私立学校としての道をたどらなければならなかったのか」という点については、「修道が藩校の流れを汲んでいるというのはどうしてなのか」ということに関わることであり、しっかりと話さなければならぬと改めて思い至った。

さらに「コミュニティ・アカデミー上幟」の案内書に掲載された「設立の趣旨」を読ませてもらった。それには、まず、「私たちは、広島の歴史と文化を地域社会に住む人々の共通理解とし、人の絆をより深めていくために『コミュニティ・アカデミー上幟』を開設することにしました。」と設立の意図が示されていた。『コミュニティ・アカデミー上幟』では、成熟した社会における地域市民の共有の場として、生き方、健康・ウェルネス、人文科学、生活科学／地域学、社会科学、キャリア支援、自然科学、語学・芸術等に関して、質の高い講座やセミナー等を提供することを目的としています。」と取り上げる分野が示されている。そして「地域は住民一人一人が『日々新たに』生きていくことにより、発展的に形成されていきます。私たちは、地域市民意識を育む知識や文化を多く多くの方々に提供し、共に学びあい分かち合うことを通して、生涯の仲間づくりをしてゆきたいと思います。」とこの地域に生きていくものとして共に生涯学び続けながら仲間としてのつながり保とうという精神が述べられていた。

本稿のはじめにあたり、わたしが修道学園の歴史に強い関心をもつに至った経緯を一応述べておきたい。わたし自身の修道との関わりは、1949年(昭和24)4月に修道中学校に入学した時から始まった。1952年(昭和27)4月に併設の高等学校に進み、卒業後、1955年(昭和30)4月に広島大学文学部に入学し、国語・国文学を専攻した。昭和34年3月に大学を卒業し、母校である修道中学・高等学校の教員となり、2004年(平成14)3月退任するまでの45年間勤務した。退職した年の5月末、修道中学・高等学校の校長から、「山田養吉先生の孫に当られる方から山田養吉の遺品が学校に寄贈されたのでこれの整理をして欲しいという依頼があった。山田養吉は、私学修道の創設者である。この依頼に応じたことが退職後のわたしの生活の方向を決めたとも言える。この中には山田養吉の日記をはじめ、書簡・掛け軸・印章などがあった。

現在、修道学園に保管されているものは1866年以降のものである。それ以前のは山田養吉の日記に記されているところによれば、江戸から広島へ船で移送する際、船が伊豆沖で遭難してそれ以前の日記や書かれた文章などが失われたということである。したがって現在保管されているのは、元治2年・慶応四年(明治元)・明治8年・明治15年の一部・明治20年・21年・22年・24年・25年・26年・27年・28年はほぼ1年を通して記されている。(明治23年は散佚している)明治29年はごく一部である。

山田養吉は、明治34年8月に亡くなっているが、明治30年から明治34年8月以前は日記の書かれた日にちがとびとびになっている。生涯を通じての日記が完全に保管されていないのはまことに残念であるが、それでも遺されたこれらの日記は、藩校のこと、広島歴史・文化について知るうえで貴重な第一次資料であるに違いない。

山田養吉の日記は、修道学園だけに留まらず、広島の近代史を語る貴重な資料であるので、単に保存するだけでなく、解説する必要があると考え、わたしはこの日記を解説することを退職(2004年)後のライフワークとすることにした。

山田養吉の日記の解説作業を始めようと決意して、2005年からはさらにもう一人元事務長を加えて修道学園史研究会なるものを立上げて学園の歴史をもう少し研究したいと活動を始めた。その研究の成果は、同窓会の集まりや、修道中学・高等学校の文化祭で発表の機会を得た。そうした中で、修道について、このような話は初めて聞いたという卒業生も少なくはなかった。修道の卒業生も藩校の流れを汲む学校であることは知っていても、ただそれだけに終わっているというのが大方であった。藩校の歴史は、1871年(明治4)の廃藩置県により藩校・修道館は閉じられたとことで終わったと思うが、それなのになぜ藩校の流れを汲んでいると言えるのかと疑問を投げかけられる卒業生もおられ、質問を受けることもあった。一般の紹介書で修道が藩校を継承しているように書かれているが、なぜそうなのかをさらに詳しく述べているものは殆どなくて修道の卒業生にもしっかりと認識されてはいないと実感していた。修道学園史研究会の会員はそのような状況を残念に思い、もっと修道の歴史を知ってもらいたいという思いをもって在校生を対象に『十竹先生物語』という小冊子を作成することになった。したがって、広島の藩校の歴史や藩校が現在の修道学園にどのようにつながっているのかについて、広島の文化・歴史として話す機会を与えられることは、得難い機会であると思われた。

1. 2つの講座の題名と各回の講座のテーマ

(1) 2016年春期の講座

講座の内容を具体的にする必要があった。広島歴史と文化として「藩校」をどのように伝えればいいのか。コミュニティ・アカデミー上巻が目指している「地域の人々と共に学び合い、分かち合うことを通して生涯の仲間づくり」をしていけるようにどのように講座を設定することを考えた。そのために講座を何回に設定するかということが問題であった。香川先生は、「5回あるいは10回の講座になってもいいですよ。広島の人に江戸から明治の時代のことをしっかり話してください」と言われた。わたしの年齢の世代は、「広島」といえば、原子爆弾が投下されたということが忘れがたい体験として記憶されている。しかし、60代後半の人であっても「原爆」について親から聞いていないと言われる。原爆投下の事実は、いま広島に住む多くの人の記憶から薄れていこうとしていることが思われる。原爆投下以前の広島歴史や文化についての知識は極めて少ないと言える。まして江戸時代のこと、特に藩校についてなど、建物も遺っておらず、ほとんど関心がないと言ってもいいくらいであろう。だからこそ、藩校のこと、それに関連したことなどをしっかり知ってもらおうと思った。10回の講座ということになれば準備も大変だという思いもあったが、折角与えていただいた機会だと思い、何とかやってみようとして10回の講義で担当することに決めた。

次に、藩校がどのようなものであったのか、そしてその藩校の精神・文化はどのように受け継がれてきているのかをたどってみようと思い、講座の題名を「広島藩の藩校から修道へ」と決めた。そして 10 回の講座の内容を考えて事務局に示した。その内容を一般向けのチラシとして作成していただき、またホームページにも載せてもらった。講座の案内は、2016 年3月下旬に公開されたのであった。その一部は以下のごとくである。

コミュニティ・アカデミー上幟 2016年度 春期講座
「広島藩の藩校から修道へ」

講 師： 畠 眞實 (修道学園史研究会会長・元修道中学校・高等学校校長)

開講日： 第1・第3火曜日 (5月、8月変更) 13:30~15:00 全10回

定員 30名 受講料 20,000円

講座の趣旨： 広島藩の藩校の歴史は 1725 年(享保 10)11 月に始まりました。藩校ではどのような学びがあったのか、藩校の歴史・精神はどのように受け継がれたのか、明治以降の広島の教育にどのように影響を及ぼしたのか。これらは、一般にはよく知られていませんが、広島の文化と人材育成を考えるうえで重要な意義をもつものと思われまます。この講義では、広島藩における藩校の始まりから、現在の私立修道学園の基礎が出来た明治時代までを取り上げ、明治維新を挟んでの社会の変革の中で、旧藩主の浅野氏のリーダーシップと中興開祖にあたる山田養吉の努力を中心にお話したいと思います。

講座のテーマ

- 4月19日 第1講 広島藩の藩校のはじめ——浅野吉長と寺田臨川 講学所ら講学館、御省略へ
- 5月17日 第2講 藩校の再興、学問所——浅野重晟と頼春水の働き
- 5月31日 第3講 学問所の教育——学問所の実態、学派の対立、異学の禁
- 6月7日 第4講 文武塾と修道館——広島藩の隠れ城、文武塾
- 6月21日 第5講 修道館以後の広島の教育——廃藩置県での修道館の閉鎖、遷喬舎と浅野学校
- 7月5日 第6講 浅野学校から修道学校へ——浅野長勲創設浅野学校、山田養吉の抜擢
- 7月19日 第7講 山田養吉の日記にみえる幕末・明治の広島 ①——幕長戦争、武一騒動
- 8月9日 第8講 山田養吉の日記にみえる幕末・明治の広島 ②——広島藩の新聞、木原適処
- 8月23日 第9講 修道学校から私立修道中学校へ——苦難の時代を支えるもの
- 9月6日 第10講 藩校の精神の継承——伝・学問所土蔵の移築・復原の意

(2) 2017年春期の継続講座

コミュニティ・アカデミー上幟の方からこの講座を継続して欲しいという要望があったので、継続講座の題名は「山田養吉の『十竹軒日記余談』」とした。2016年の講座において第7講及び第8講においてすでに「山田養吉の日記にみえる幕末・明治の広島①・②」として日記に書かれていることを講義していたが、10回の講座の中で話した内容は概説的であったため、もう少し詳しく紹介したいという思いがあった。日記を読んでいくうちに日記の中にはわたしが知らなかった以前の広島のことが多くあった。そうしたことを通して今は忘れられた近代広島の歴史・文化を学ぶことができるのではないかと思ったのである。そして、2016年に聴いてくださった方が、2017年の講座に出席されてまた同じことを話していると思われないような内容にしたいと思った。

講座の内容は、ホームページに2017年3月下旬に公開された。その一部を紹介しておく。

コミュニティ・アカデミー上幟 2017年度 春期講座 「山田養吉『十竹軒日録』の余談」

講師： 畠 眞實 (修道学園史研究会会長・元修道中学校・高等学校校長)

隔週 火曜日 18:30～20:00 1回の受講料 1,000円 定員 30名

講座の趣旨： 昨年、「広島藩の藩校から修道へ」という講座を10回にわたり担当させていただきました。その中で「山田養吉の日記にみえる幕末・明治の広島」という題目で2回ほど明治時代の広島の社会情勢をお話いたしました。山田養吉の日記には、明治時代、広島に学校が設立されていく様子、社会のありさまなどが折に触れて書かれています。今、目にしている広島が明治にはどんな街であったのか、山田養吉の日記に触発され、時には地図を見ながら一緒にたどってみたいと思います。少し歳を召された方には両親の生きられた時代、若い方には郷土発展の原点を知っていただきたいと思っています。

講座の内容

- 4月25日 第1講 広島最後の藩主浅野長勲(1)——少年時代～小御所会議など
- 5月9日 第2講 広島最後の藩主浅野長勲(2)——鳥羽・伏見の戦い～イタリア公使など
- 5月23日 第3講 志和・広島藩の隠れ城・文武塾——戦時に備えての政事堂・学問所など
- 6月6日 第4講 広島の大一揆(武一騒動)——廃藩置県後の広島の混乱
- 6月20日 第5講 土井百穀の遷喬舎とその後の学校——官立外国語学校～広島第一中学校など
- 7月4日 第6講 木原適処——神機隊の結成・広島英学校女子部など
- 7月18日 第7講 明治の広島の女学校——広島英和女学校・山中高等女学校など
- 8月1日 第8講 隻脚の鬼将軍・佐藤正——日露戦争の武勇・幻の広島市長
- 8月22日 第9講 広島の新報の歴史——日注雑記から中国新聞へ
- 9月5日 第10講 春和園と広島の新報の街あれこれ ——今中大学の別邸・西堂川・広島の電車など

2. 講座の構成と各回の講座のポイント

(1) 2016年の講座

1) 10回の講義の構成

この講座では、「講座の趣旨」において示しているように、「藩校ではどのような学びがあったのか、藩校の歴史・精神はどのように受け継がれたのか、明治以降の広島にどのような影響を及ぼしたのか」を講義する。

第1講から第4講は、藩校の創設から閉校までの説明、第5講・第6講は、藩校以後の広島の教育のようすについて、第7講・第8講は、藩校の先生であり、私学修道の創立者である山田養吉の日記を通して見る広島の幕末のようす 第7講義が幕長戦争、武一騒動、8講広島の新聞、木原適処のことを、第9講は、藩校の流れを汲む教育が浅野長勲から山田養吉へどのように受け継がれたか、第10講は、藩校の流れを汲む修道学校が現在の私立修道中学・高等学校にどのように受け継がれたか。具体的には修道中学・高等学校を訪れ、記念品室の浅野重晟侯？の親筆の「至聖先師孔子神位」の木主、および伝・学問所の移築・復原された土蔵を見学する。

2) 講座のポイント

第1講 藩校の設立時期を確認する。

現在、修道学園においては、修道中学・高等学校・広島修道大学いずれも創立記念日を1725年(享保10年)11月4日と定めている。これは会津の日新館(1664年)、岡山の藩校(1669年)、長州の明倫館(1718)に次ぐものである。藩校の流れを汲む学園としてこの日を創立記念日としていることには大切な意義がある。これ以前の元禄時代を創始とする説もあるが、組織的に藩士の教育が始められたのはこの時をもってするということに定まっている。藩校、講学所を開いた5代藩主・浅野吉長は、学問と政治の一致を目指した数少ない大名の一人であったと言われている。吉長が家臣に示した「敬」の一字(「論語」為政)は修道の建学の精神を示すもとして現在においても重んじられている。講学所の督学を吉長に命じられた藩儒・寺田臨川による「学規三則」は、学ぶ者の心得を示したもので、「学問は自分の身を修めるためのものだ」と言っている。臨川のしゃれこうべを広島市東区にある国前寺の墓から掘り出して復元した胸像が修道中学・高等学校に所蔵されている。講学所は白島の稽古屋敷の一部を割いて始められたと言われる。この教授方法などのあらましを説明しておきたい。

第2講 藩校の再興

広島の藩校は、吉長の治世、飢饉による財政難のため「御省略」によって講学館(講学所を改称した)が閉鎖されたが、1782年(天明2)7代藩主・重晟によって39年ぶりに再興された。藩校は、ただ「学問所」称された。重晟は財政の立て直しを一番の課題としたが、学問にも関心が深く、学問は国家を治める基本となるものであると考え、一つの学派に偏ることなく学者を登用した。このことは後に学問所内において学派間の対立を招く要因にもなった。重晟が民間から頼春水、香川南浜を抜擢して従来世襲であった教授らの列に加えたのは斬新な施策であった。春水は学問所の組織・教育内容を整えていった。広島藩の藩校については学問所の内容を説明しておくことが重要である。学問所の聖廟に掲げる「至聖先師孔子神位」の木主は、重晟の親筆によるもので、現在修道中学・高等学校の記念品

室に保管されていることの意義を述べる。

第3講 学問所の教育

この講義では、学問所において教授された学派は、古学、朱子学、神儒学などである。古学派についても古義学派、護園学派などさらに分け入った説明を要するほどで説明も容易ではない。学問所内の学派の対立が激化し、学生の対立にまで及ぶようになり、朱子学以外の古学などの教授は学問所への出入りが禁じられる。これは幕府の寛政異学の禁(1790年・寛政2年)に先立つこと5年(1785年・天明5年)である。

第4講 文武塾と修道館

学問所で1863年(文久3年)新しい人材育成計画が示される。軍制が西洋式に改定される。これは朱子学を正学派とするというような藩校に対する考え方を放棄するものであり、軍事教育の強化が図られる。1868年(慶応4・明治元年)山田養吉の建議で学塾が城内に設けられる。幕末期における藩の防備体制の強化策に連動して志和の地に文武塾が設立される。ここで文武にわたる教育が行われる。このことは時代の動きのなかで教育がどのようになされたかという点で注目される。一方学問所は、時代の動きを見据えて新しい学問も取り入れられ、学問所を城内の八丁馬場に移し、漢学・洋学・皇学(国学)・医学の四学を統合して修道館と称した。そしてこの修道館が1871年(明治4年)廃藩置県によって閉館になり、藩校としての歴史を閉じる。

第5講 修道館以降の広島教育

修道館のあとを譲り受けて己斐の土井百穀(善右衛門)が私塾「遷喬舎」を設立し、イギリス人教師を招聘して英語教育を始めた。これに対して官立の英語学校や師範学校が創設され、それを受け継ぐ形で広島県の教育機関が開設されていった。この流れを把握してもらう。

第6講 浅野学校から修道学校へ

こうした官立・公立の学校の開設に対し、旧藩主浅野長勲は、藩校の精神を受け継ぐ浅野学校を設立し、それを修道学校と改称して時代の要請に応える学校とするため旧藩校の教師であった山田養吉を任命した。

第7講・第8回は山田養吉の日記に見える幕末・明治の広島

この2回の講義は、直接、藩校そのものの流れについて話すのではないが、藩校によって育てられた人たちを中心にして幕末・明治の広島の歴史や文化が、どのように練り広げられたかを山田養吉の日記を手がかりにたどってみる。

第7講は、幕長戦争と広島大一揆(武一騒動)

幕長戦争については、山田養吉が目にした安芸口の戦いに敗れた彦根藩・高田藩の兵士さま。広島の大一揆では、山田養吉が県から派遣された説諭隊の一員として加わり百姓たちの襲撃に遭遇するようすを講義する。

第8講は、広島の新開と木原適処

明治の新聞は、山田養吉が発刊した広島で初めての新聞「日注雑記」からその後の新聞の変遷をたどる。木原適処は、神機隊の設立の中心人物としての面と女子教育に尽くした面とを紹介する。

第9講 修道学校から私立修道中学校へ

県立広島中学校が1886年(明治19年)年、学校令により尋常中学校と改められたのかを機に浅野家が修道学校の経営から手を引かれる。学校の存続の危機に際し山田養吉が独力で修道学校の経営を決意し、私学としての厳しい道を歩むことになる。苦しい時代をどう乗り越えたか、どのようにして藩校の精神を引き継いでいったかを講義する。

第10講 藩校の精神の継承

2015年、伝・学問所の土蔵が修道中学・高等学校の校地内に移築・復原されている。これと浅野重晟の親筆である「至聖先師孔子神位」の木主が保管されている同校の記念品室を見学して、藩校を受け継ぐ具体的な形に触れる。

(2) 2017年の講座

1) 10回の講義構成

2017年が大政奉還150年の年にあたるということで、この講座においても広島幕末・維新について触れてみたいという思いがあった。広島藩の藩校は、1871年(明治4)の廃藩置県によって閉じられ、それ以後の広島の教育がどのようになされたかについての大筋は、2016年の講座において話したのであるが、もとより十分な内容であったとは言えず、広島藩校からそれ以後の広島の教育について知るうえで重要な人物である浅野長勲にさらに焦点を当て、山田養吉の日記を手がかりにしながら少し詳しく話してみたい。そして教育面だけにとどまらず、幕末の動乱のなかで広島藩及び藩主浅野長勲の動き、それらに関わりのある人物やことがらも取り上げてみることにした。

第1講・第2講では、浅野長勲を取り上げた。第3講は、広島藩の幕末における防備的な政策、それに連動しての藩の文武教育。第4講は、旧藩主引き留め運動から一揆へのながれ、幕末・維新の広島。第5講、藩校閉鎖後の広島の教育の動き。第6講は幕末から明治への世情と教育、第7講は明治の女子教育(洋と和の接触)、第8講は日清戦争と広島、広島の私立学校の状況、第9講は広島の文化としての新聞の歴史(浅野長勲のかかわりも)、そして、第10講は明治・大正の広島(街の移り変わり)について。

以上、10回の講義を通して幕末から明治・大正にかけて広島の歴史・文化上のエポックと中等教育の発展をたどれるように構成した。

2) 2017年の各講義のポイント

第1講 広島藩最後の藩主・浅野長勲(1)

広島の人々の浅野長勲への関心は、特に高齢の方にはかなり強いと感じているのはわたしだけではないだろう。浅野長勲を通して幕末の広島藩の動向にも触れることができると思われた。幕末史の中で薩・長・土の陰に埋もれがちな広島藩や浅野長勲の働きについて、とりわけ小御所会議におけるはたらきを広島側に遺されている資料から改めて考えてみたい。

第2講 広島藩最後の藩主・浅野長勲(2)

小御所会議の結果に不満から引き起こされた鳥羽・伏見の戦い、この戦いで土佐藩とその立場が入れ替わった広島藩、名誉回復のために戊辰戦争での広島藩(神機隊など)の戦いぶりや明治新政府で必ずしも重用されなかった浅野長勲の生き方などを扱う。

第3講 志和・広島藩の隠れ城・文武塾

幕末の世情不安に備えて政事堂の建設が、志和の地で密かに行われ、それと連動して学生 300人を文武において教育するために文武塾が開設された。藩校の特別な形での在り方に注目する。またこの現在の東広島市志和において木原適処の建言により神機隊が結成(第6回の木原適処の講座にも関連している)されていることもあり、広島幕末・維新のあまり知られていない一面に迫る。

第4講 広島の大一揆(武一騒動)

廃藩置県による広島県の社会情勢について学ぶ。この一揆は、旧藩主・浅野長訓の引き留め運動に端を発している。山田養吉は広島県の要請で役人と共に騒動の鎮静化のための説諭隊に加わった。その帰途、農民に押しかけられるという体験がある。

第5講 土井百穀と遷番舎とその後の学校

2016年の第5講「修道館以後の広島教育」で話した内容をもう少し深めた内容である。修道館閉鎖後の遷番舎の広島教育において果たした役割は、遷番舎自体はわずか2年あまりの存在であったが、大きいものがある。その意義を学ぶ。

第6講 木原適処

神機隊の結成に貢献しているだけでなく、女子教育においても顕著な働きがあった。明治期に創設された広島英和女学校の設立に際してかれの「広島英学校女子部」が統合されている。

第7講 明治の広島女学校

広島英和女学校が設立されたことに対して山中高等女学校が設立されたことなど明治の広島女子教育についての歴史を知る。山田養吉の日記に出てくる「広陵女学校」については広島県の教育に関する史料では記したものを見つけることはできなかったが、その学校が現在の下関の梅光学院

につながっていることも紹介したい。

第8講 隻脚の鬼将軍・佐藤 正

一見センセーショナルなテーマである。日清戦争で銃弾を受け、手術によって片脚を失った佐藤正は、かつて山田養吉の後輩として学問所の句読師を務めており、のちに修道学校の総理(理事長にあたる)に就任する。広島では大御所的な存在であり、広島市長にも選ばれたが、身体的な理由もあり、一度も登庁することはなかった。先年、乃木大将から佐藤に宛てた書簡を手に入れた修道の同窓会から修道中学・高等学校に寄贈されている。その書簡の内容を紹介して明治天皇の崩御に殉じた乃木の遺書と酷似している点も話す。

第9講 広島の新報の歴史

このテーマは2016年の講座でも話しているが、今回はさらに詳しく説明したい。山田養吉によって始められた『日雑記』をもって始まった広島の新報の歴史を話す。最初は、日刊紙ではなく、また商業的にも発刊が長くは続くことがなかった。現在の地方紙として地元で馴染まれている『中国新聞』に至るまでの歴史をたどる。この間『安芸津新報』という新聞が、浅野長勲がつくらせた地方政治結社「政友会」の機関紙として発刊されていることに触れたい。

第10講 春和園と広島の新報の街あれこれ

山田養吉の日記にしばしば出てくる「春和園」とは何であろうかと気になった。どこにあったのか。どなたのところであったのかと思い、調べていくうちに広島藩の執政・今中大学が広島藩9代藩主・浅野斉肃(なりたか)から拝受した別邸の庭園であったことが分かった。春和園という名は頼春水が命名したのだという。今中大学については、その経済政策を批判されたこと、春和園がその維持が財政的に困難なため料亭として賃貸したことも知ることができた。料亭であった時代に山田養吉がしばしば利用していたことが日記に記されている。そしてそれが民間の経営する公会堂となり、それが買い取られて広島市公会堂となったという歴史も分かった。わたしの幼い日の記憶に「公会堂前」という電車の停留所があったことがある。そのことから広島の電車が走りだした歴史について調べ、その軌道は広島城を築城する時に作られた運河である「西堂川」を埋め立てたのだということ、「西堂」というのは「安国寺恵瓊」を示していることもわかった。このことは、白神社の所に西堂橋が架かっていた思い出にも広がっていく。このように講義を展開していくことで広島の歴史に対する思いが広がっていく。それが最終講の狙いである。

10回にわたる各回の講義について提示したテーマの文言そのものは、それぞれ異なっているが、多くの講義において内容に関連性があることにも気づいていただきたいという思いがある。例えば、浅野長勲は、第3講の「志和・広島藩の隠れ城・文武塾」の隠れ城(政事堂)の建設に関して、第4講の「広島の大一揆」にも、第5講の「土井百穀の遷喬舎とその後の学校」では、「浅野学校」のことや「修道学校」に関する話で登場する。第9講の「広島の新報の歴史」においても『安芸津新報』の発刊に関わ

りがある。木原適処については、第3講に広島藩に神機隊の創設を建言したことで登場するし、第7講の「明治の広島の女学校」のところで自ら設立した学校が広島英和女学校の設立に関わっているなどである。

山田養吉の日記を解読しながら、わたし自身が明治・大正・昭和の広島に関することや街の様子についていろいろと初めて知り得たことも多かった。そうしたことが「広島の歴史と文化」を知ってもらいきっかけになるのではないかと考えた。このことは、「コミュニティ・アカデミー上幟」が講座を開設された目的に沿うものではないかと考えたのである。

おわりに 社会人講師を務めての感想

この度、思いがけなく、講座「広島藩の藩校から修道へ」という題目で、2016年と2017年の2年間にわたり計20回の講義を担当させてもらった。この講座を担当させて頂いて、わたしがどのようにこの講義を受けとめたか、またそれによって人生が豊になったのか、ということを変更して述べてしめくりとした。

本レポートの最初のところで述べているように、わたしは、現役時代は高校の国語教師であり、後に学園の管理経営者であって、一般市民を対象にして講師を務めるようなことはなかったが、今回はどういふわけか、お話を聞いて、講座を引き受けることに心が動いた。その時の心境は、広島の人が明治維新を挟んでの郷土の歴史・文化にあまり関心がないという指摘があったことに同意する気持ちがあったからである。またそういう傾向があるからこそ、わたしが退職後のライフワークとして設定していた山田養吉の日記解読によって得た知見を広く伝えたいという気持ちが心中にわき起こったことも事実であった。このような気持ちは、広島の文教精神が江戸時代から現在まで広島の学校に継承されていること、また中流人士を養成する中等学校の郷土における発達が多くの先人たちの奮闘努力によって成し遂げられてきたことを伝えていくことは、わたしたちの世代の義務でもあったからである。

このような気持ちから浅学も顧みず、大役を引き受けた次第であるが、年齢的に80歳となり、市民講座の講師を初めて勤めるというのは、体力的にも、また半年間にわたる講師としての仕事の拘束から、不安も無いわけではなかった。講義を2週間に一度開くという配慮は、70歳以上の講師には疲労回復と予習や調べもののために、ちょうどよい時間配分であると思われた。今までにも、時に郷土史会とか学校の同窓会関係などで講演などは行ったことがあるが、一つのテーマを10回の講義で以て追究するというような講座の担当は初めての経験であった。一回限りの講話では、丸めて話をする事が多く、広く浅く知っているだけでもなんとか啓蒙・啓発の役目を果たすことが出来るが、講座となるとそうはいかないものである。本文にも述べたが、講義の中で取り上げた人物が何度も出てきたりするし、登場人物の人間関係や事蹟が相互に入り組んでいることも多いものである。講座では、前の講義で話したことと今回の講義とをダブらせて進めて行く。特に社会の変化につれて学校のあり方や形態も変わってい

くことからして、地域社会の出来事をよく調べていくことが求められた。そうしたことが積み重なって、本講座の主題である広島藩の文教方針が今日に及んでいることを、受講生なりに考えることができるようになる。そうした支援をするのが講師であるというのがよくわかった。

講座では、講師と受講生の関係は、単なる講演会とは異なり、回を重ねるごとに濃くなっていくのがわかった。受講生には修道高校の時の教え子や保護者、また郷土史に関心のある人たちが参加しておられた。昔の教え子との再会はとても嬉しいことであつたし、講座を担当していることが各地に伝わると、懐旧の念止みがたく、という人たちとも連絡がとれるようになった。講義をしていると、受講生それぞれの理解度が講師にもわかるようになってくる。わたしの講義では、講義ごとに詳しいレジメ資料を用意し、講義で概要を理解し、後ほど自宅で詳しく調べ検討できるように配布した。そうした学習をしてきてくれるのは大人の真の学習であると思うことが多くあつた。時に、受講生の理解が十分でないと思われるところは、講師の講義が不十分であるとも悟られることであつた。社会的事件に関しては、受講生の方がよく知っていることもあつたりして、この講座は講師と受講生が一緒に学び合った学習会であつたと思う。

わたしが今回、講座を担当させてもらえたのは、世に伯楽ありて、わたしのようなものでも推挙していただいたからである。年齢 80 歳を越える段階で、このような新しい経験をさせていただき、しかも自分のライフワークを発表してもらい、さらに深めていくことができたこと、また、わたしよりも若い人たちに、郷里の大事な歴史と文化を伝えることができたことは、なによりも「生きがい」になり、かつ我が人生を自ら豊にすることになったと思う。「人生 80 年時代」といわれる時代は過ぎて、今は「人生 100 歳時代」といわれるようになった。平櫛田中は「六十、七十、渙垂れ小僧 男盛りは百から 百から」と喝破されたそうであるが、これからの長寿社会では、八十、九十での学習活動への社会参加、また、六十、七十の渙垂れ小僧の時代に、誰もが何らかのライフワークを持ち、日々続けて学習していくこと大切である、と思つた次第である。

島 眞實 (はた まこと)

1936 年(昭和 11 年)、広島県生まれ。1949 年(昭和 24 年)、修道中学・高等学校に入学。1955 年(昭和 3 年)広島大学(文学部国語・国文学専攻)に入学。1959 年(昭和 34)修道中学・高等学校に就職・勤務。1995 年(平成 7 年)から 2004 年(平成 16 年)まで校長を務める。退職後、修道学園史研究会を結成し、会長を務め現在に至る。著書は『十竹先生物語』(修道中学・高等学校発刊)研究会会員と共著。副読本『日本文学史』(第一学習社発刊)共著。なお、修道中学・高等学校の『紀要』に山田養吉の日記の解説を掲載中。